

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA

NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES



ブラジル特報



特集
ブラジルの高度医療
「再評価」されるブラジルの民芸品

あの町この町
マカパー



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

世界をむすんで、 未来をひらく。

ブラジルとめざす、明日がある。

事業投資を軸に総合力を活かし、
新しい価値を。



Photo: Dario Zalis / Vale
鉄鉱石の生産・販売で世界最大のシェアを誇る
ブラジルのヴァーレ社に、2003年から経営参画。

食糧の安定的な
供給のために。



子会社シンガー社は
東京都23区の2倍に相当する土地で農業を展開。

ガス需要の拡大に応え、
暮らしや産業に貢献。



国営石油会社ペトロブラス社・州政府と共同で
ガス配給事業を推進。

BRA



2014-0827-321

挑戦と創造

三井物産
www.mitsui.com/jp

目次

〈あの町この町〉

マカパー 3
加藤 壘

【特集】ブラジルの高度医療
ブラジルにおける医学の先進性 4
秋山 一誠

【特集】ブラジルの高度医療
国際協力機構（JICA）が
医療支援でブラジル日系病院と連携 6
小原 学

「再評価」されるブラジルの民芸品
ーペルナンブーコ州の事例からー 8
山本 綾子

ビジネス法務の肝
ブラジル市場撤退の留意点 9
渡邊泰秀／笠原康弘

日系企業シリーズ 第34回
フルッタフルッタ上場の陰に 10
長澤 誠

文化評論
シコ・ブアルケの小説第五作を巡る
ファクトとフィクション 11
岸和田仁

（連載エッセイ）
カンポリンボの丘に校歌が流れる 12
服部公一

（ウーマンアイ）
「香りモンスターのブラジル人」 13
パウリーナ 新子 西原

（ジャーナリストの旅路）
大リーグ、次の狙いはブラジル？ 13
市川亮太

（最近のブラジル政治経済事情）
失業率／ペトロブラス（石油公社）総裁交代／
水供給危機＆電力危機 14

イベント／新刊書紹介／協会からのお知らせ 14
びっくり豆知識 15



写真家田中克佳の
「表紙のひとこと」

毎年、2～3月に行われ
るリオデジャネイロのカー
ニバル。世界最大の祝祭
に国中が盛り上がる瞬間で
す。（65年生まれ、早稲
田大卒、博報堂入社。93
年に退社後渡米し、独立。
ニューヨーク在住。www.
katsutanaka.com）

マカパー

大西洋に面した州の中で
はブラジル最北端にあるア
マパー州。州面積の4分の
3は熱帯雨林に覆われ人口
も67万人と少ない為、ブ
ラジル通の読者の方々に
とっても馴染みのない州と
思うが、私の印象に残った
のは州都マカパーだ。



18世紀にアマゾン地帯へのアクセスを確保す
るため、ポルトガル人が要塞を築いたのがこの街
の始まりと言われている。以後1822年にブラ
ジルが国家として独立した後も、フランス軍と土
地の所有権を巡って対立が続いた歴史があり、当
時の攻防を今に伝えるサンジョゼ城塞が大西洋
岸で静かに佇む。

印象的なのは、多くの人が南半球にある国と
信じて疑わないブラジルの中であって、マカパー
の街の中心には赤道が走っており、南半球と北半
球が混在する街である点だ。アマゾン地域特有の
澄んだ空の下に赤道起点の塔が力強くそびえ（写
真）、その台座に刻印された標記「二つの半球
の上に今同時に立っていることのセンセーショ
ンを感じよ」一の通り、赤道を跨いだ瞬間は実に
感慨深いものがある。

磁力線の向きが異なる北半球と南半球とでは、
水が流れ落ちる際の渦の回転方向は逆になるが、
このマカパーでも赤道の両側でペットボトルの
水を逆さにすれば、水を流しながらその渦の回転
方向が逆になっている様子が見られると言う。

マカパーの主要産物はアサイーやブラジル
ナッツ等の農産品とマンガン・スズ等の鉱物資源
であり、現時点では先進的な技術や産業集積があ
る訳ではない。しかしながら、単科大学が新たに
二校進出する計画もあり、生物多様性やクリーン
エネルギーに関する研究が今後伸びることが期
待されていると聞く。公的サービ
スが州GDPの約半分を占め、公
共投資による建設や資源開発が産
業を牽引する構造のこの街が、今
後どのように発展していくのか。
気長に待ちながら、再び両半球が
交わるこの街を訪れてみたいと思
う。

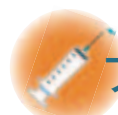
加藤 壘
（会社員、ブラジル在住2年）





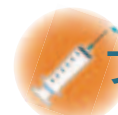
ブラジルにおける医学の先進性

秋山 一誠（サンパウロ在住医学博士）



ブラジルは医療発展途上国

国連が発表した 2014 年度の人間開発指数（HDI-Human Development Index）が 187 国中 79 位のブラジルは間違いなく医療発展途上国である。HDI は平均寿命、教育指数および GDP 指数の三つの指標からなっており、医療の発達は直接平均寿命に影響する。現在ブラジルには 287000 人強の医師がいるが、2/3 はミナスジェラエス州以南の東南地方と南地方で活躍している。つまり、中部、北部と東北部には医師の密度が低いことを示し、これらの地方ではいわゆる無医村が多く見られる。例えば、筆者の同級生で医学部卒業後トカンチンス州に移住した者がいるが、1990 年前半時点では半径 250km で唯一の医師であった。現時点ではブラジル全国平均で人口 1000 人に対し医師 1.5 人であり、WHO が推奨する最低、医師 2.5 人 / 人口 1000 人以下である。これが 2013 年よりブラジル政府が実施している医師輸入・医学部大量創立政策（Programa Mais Médicos）の根拠とされているがこれについては後ほどコメントする。



ブラジルにおける先端医学

このような医療環境で先進的な医学が行われているかどうかを考察する。先進的な医学をいうとまず連想するのが「先端医学（医療）」または「高度先進医療」であろう。いろんな名称があるが、本文では先端医学とする。先端医学の関心は大まかに二つに分類できる。一つが現在治療が確定していない健康上の問題の解決方法を探る方面。二つ目が現行の治療方法をさらに良い方向へ改善する技術を探る方面。また、実施面では「研究」と「臨床」にも分類できる。結論からいうと、当地ブラジルの先端医学は研究が弱く、臨床が強いと言える。理想的には研究と臨床が同時に行える環境こそこれらがお互いに生きるのだが、この環境が整備されていないのが当地の現状であろう。日本では各医学部に先端医学関連の部署が設置されているが、ブラジルの医学部は少ない例外を除き、普通の医師を養成するのが精一杯といったところである。いかなる研究でも

すぐに実用化するものではないので助成システムが必要である。研究先進国では、公共と私設の助成システムが豊富であるが、ブラジルでは CNPq（Conselho Nacional de Desenvolvimento Científico e Tecnológico - 科学と技術の開発国家評議会、連邦政府の「科学と技術と革新の省」の部門）と FAPESP（Fundação de Amparo à Pesquisa do Estado de São Paulo、サンパウロ州研究助成財団、サンパウロ州政府の「高等教育局の外郭団体」の 2 機関が主な助成機関であり、公共資金がほとんどである。反面、総合的に社会的な整備がない事は先進国では考えられないような事が行えるのもある。つまり、医師免許取得以前から医療行為に従事でき、医療費が無料の大学病院に大量に来る患者さんで臨床訓練ができる事を示している。このため、手技が問われる部門ではブラジルの（まともな医学部出身の）医師は先進国の同職者と比較して上手だと言える。



先端医学の分野をいくつか

先端医学の各分野としてはテーラーメイド医療（遺伝子レベルでの個体差に合わせた医療）、分子治療、細胞遺伝子治療などの研究と確立や、医工学を駆使した低侵襲医療、脳神経科学への応用などがある。前者の分野では癌、免疫疾患、糖尿病や虚血性血管疾患などのいわゆる生活習慣病関連、難治性疾患、細胞再生・移植医学、治療の確定されていない感染症の治療や予防などが主な研究対象である。後者ではロボット工学を用いた手術、腹腔鏡や非有線式カメラなど内視鏡技術、カテーテル経由の血管治療、脳神経損傷に対する工学応用などが代表的である。ブラジルではどのような事がされているのだろうか？先端医学で最も目を引くのが、脊椎障害に対する対策として、脳波で制御する外骨格（exoskeleton）の研究であろう。これはサンパウロ大学出身の米国 Duke 大学教授の Nicoelis 医師の研究であり、去年のワールドカップのオープニングでかの外骨格を着用した脊椎麻痺の 29 歳男性がサッカーボールを蹴る場面が有名である（開催式の一部であり、平行して他の催し物があったのでテレビでは 1 秒しか映らな

かった。そのため実際本当に作動したのかどうか議論があるが）。その他、サンパウロ大学で糖尿病治療として幹細胞を使った膵臓細胞再生の研究やリオデジャネイロの FIOCRUZ（Fundação Oswaldo Cruz、オスバルド・クルス財団、連邦政府の保健省の外郭団体）のデング熱ワクチン開発などが挙げられる。FIOCRUZ は 1900 年創立当初からブラジルの感染症系の先端医学を担っているといえるであろう。元々ペスト対策に創設された機関であったが、クルス博士主導で当時ブラジルの首都であったリオの黄熱を駆除した実績がある。最近では中南米で初めて HIV 菌を分離したり、開発途中のシャーガス病の治療薬やマラリアのワクチンの研究などがある。広い国土の上、医療格差が激しい当地で最も期待される先端技術は遠隔医学（telemedicine）であろう。これはインターネットなどの通信技術を活用して、診察、診断、治療をする行為である。例えば、僻地の医師が医用画像を中心地の専門医療機関に送信して、診断の支援を仰ぐ。遠隔医学で一番高度とされる行為は遠隔手術である。しかし、お粗末なブラジルの通信事情では実用化が困難であるのが現状である。



臨床方面での先端医学

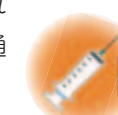
ブラジルの医療で世界にも誇れるのは、臨床方面であろう。ブラジル人は意外と器用であり、好奇心旺盛で、新興的社会のため元からの慣習やしがらみが少ないので新しい技術や知識に対する抵抗が少ないように思われる。この例として、心臓移植手術と肝臓移植手術はどちらも世界で 2 例目であったことが挙げられるのではないかな。慣習の例としては、医療鍼灸が典型的ではないだろうか。日本ではもともと東洋医学が存在したが、明治政府により禁止され再度医療システムに完全に取り入れられるまでに 130 年ほどかかっている。禁止の派生で鍼灸師制度が出来たので鍼灸そのものは存続したが、医師は鍼灸を敬遠したのだろう。当地ではこのような歴史がないので、1980 年代までは冷たい目で見られていたが 1990 年代に 10 年くらいでアッサリ伯国医師会の分科会にまで成長した。



ブラジルの医療ツーリズム

サンパウロ市の第一線の病院では外国の患者が治療受診に訪れ、増える一方である。この 10 年間で毎年 15% の増加率の試算がある。連邦政府観光局の統計では年間 6 万人程度が医療観光にブラジルを訪れるとするデータも存在する。この現象はまず、当地トップクラスの医療機関は米国

の同クラスの機関と差異が無いからである。また、医療内容もさることながら、（まだ）人件費が比較的安いので医療スタッフを大量に投入でき、病院のいわゆるホテル機能が大変優秀であることも人気の一員にあると思われる。邦人でこの事実を活用しているのは駐在家族の奥様方ではないかと思う。然り、「わざわざ」ブラジルで出産をされているケースをよくみるのである。語学や習慣の違いの問題以上にメリットがあるからであろう。日本人を含む外国人がよく受ける医療行為は、癌治療と皮膚科エステ関連、人工授精、外科では美容形成、眼科、歯科、整形外科、心臓循環器系、神経外科、肥満外科手術などである。特に美容形成手術は世界的にも有名で、最も著名なのはイーヴォ・ピタンガイ博士であろう。リオのボタフォゴ地区にあるクリニックには世界中から患者が受診し、特にアラブの王室のお気に入りであることは有名である。皮膚を露出する機会が多く、美容を重要視するリオならではの現象である。



「Mais Medicos」の問題点

最後に紹介したいのが、先端医学ではないが、先端医療政策といえる、現政権が 2013 年に開始した「Mais Medicos」（直訳：もっと医者）政策で、ブラジルの医療過疎や偏在を解決しようとするものである。まず国外で医学を学んだ医師免許の怪しいブラジル人やキューバ人医師を 1 万 5 千人程度過疎地に投入する。平行して、2018 年までに 1 校 100 人位の医学校を 110 ～ 120 校創立して、毎年 11000 人医師を増やすといった無謀な政策である。世界的にも例のない試みである。当地の医療過疎は医学校の不足から来るモノではなく、地方に医師を分配し、根付かせる政策が無いのが問題の根本にあり、そのあたりを整備しないでは先が思いやられる。



国際協力機構(JICA)が 医療支援でブラジル 日系病院と連携



小原 学
(JICA 中南米部
計画・移住課長)

ブラジル日系社会は1908年に笠戸丸がサントス港に最初の移住者が到着して以来、一世紀以上を経て、今では157万人以上の世界で最も大きな日系人口を有するまでになっている。移住者及び日系人は農業分野のみならず、政治、経済、学術の各方面で活躍し、医師、弁護士など社会的地位の高い職業に就く者も多い。人口2億人以上のブラジルに占める日系人の割合は1%にも満たないが、同国の経済・社会の発展、ひいては日本とブラジルの友好関係の増進にも大きく貢献している。

安倍訪伯がきっかけに

2014年8月、日本の総理として10年振りに安倍総理がブラジルを含む中南米を歴訪した際に、ブラジル日系社会の重要性を再認識し、今後、日系社会との絆をより太くしていくと表明した。その具体的な施策として、(1)日本語教育の普及支援、(2)JICAボランティアの増員、(3)次世代の日系人育成拡充、(4)日系病院に対する支援を掲げている。JICAでは政府方針に則って、日系社会への支援・連携策を推進していく考えであるが、今回は特に上記(4)の日系病院に対する支援について述べたい。

ブラジルにおいて、多くの日系人が医学の道に進み、教授や研究者、医師として活躍している。また、日本人移民の医療衛生改善のために設立された病院も存在し、今では、日系人のみならず、非日系人も対象とし、各地の重要な医療機関として機能している。代表的な病院としてはサンパウロの「日伯慈善会サンタクルース病院」、「日伯友好病院」、ベレンの「アマゾンア病院」

などである。いずれの病院も、日系人医師や看護師が多く勤務しており、日本語での対応や食事、日系人に対する巡回診療の実施など、医療を通じた日系人支援とともに地域医療向上にも貢献している。

JICAはこれまで、その前身組織の一つである海外移住事業団時代から、移住者・日系人の医療衛生の改善・向上を目的として、施設・機材の整備への助成、巡回診療の支援、研修や留学を通じた人材育成などに取り組んできた。医療分野における人材育成については、累計700人にもものぼる。こうした日系社会への支援事業は今後とも継続していくが、現在、重点を置いているのが日系社会をパートナーとした連携事業の推進である。ブラジルにおいて幅広い人脈とネットワークを有する日系社会と連携して、JICA事業を推進していくもので、特に本邦民間企業の技術やノウハウが活用されていくことを期待している。その中の一つが医療分野である。日本政府が進める医療技術・サービスの国際展開にも貢献しつつ、安倍総理が表明した日系病院への支援・連携も推進していきたい。

日系病院関係者を招へいして セミナー開催

その最初のステップとして、2014年10月に「ブラジルを中心とした中南米日系社会との連携セミナー ～日本の医療・福祉分野の技術・サービスの国際展開～」を開催した。ブラジルの医療事情に詳しい有識者を招き、現地の状況や日系人・日系病院の状況について日本の関係者に理解を深めてもらうこと、ブラジルにおけるビジネス展開等において日系病院との連携を検討

するきっかけとなることを目的とした。結果として、企業を中心に100名以上の参加を得て、高い関心を示して頂いた。

より具体的な連携策を検討するため、2015年2月には6つのブラジル日系病院（日伯友好病院、サンタクルース病院、アマゾンア病院、杉沢病院、パラナ病院、ノーボアチバイア病院）の院長、経営者（計12名）を招へいした。各病院は将来的な施設拡張計画等もあり、日本製機材の導入への関心が高い。約2週間の間、政府関係機関や大学等との協議、医療機器メーカーの視察等を行うとともに、今後のブラジル保健医療にかかる医療機器・サービスの市場展開及び日系病院との連携の在り方について意見交換した。また、幅広いネットワーク構築の機会とすることを目的として前回10月と同様に都内で「国際医療展開におけるブラジル日系病院との連携セミナー」を開催した。

日系研修事業を民間連携にも活用

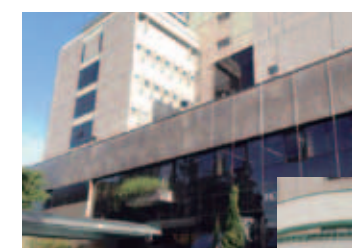
JICAとしては、JICAの民間連携スキーム（各種調査や民間技術普及促進事業等）や日系支援事業（日本での研修等）にもつなげていきたいと考えている。特に「日系研修」スキームは、文字通り日本での研修を通じて日系人の人材育成を図る提案型のスキームで、民間企業が提案者となり企業自身が受け入れ先となるような研修も増えてきている。

こうした取り組みにより、本邦企業のビジネス機会の拡大も図り、日本の最新技術やノウハウの導入にもつなげていくことが重要である。日系病院はそのような日本の技術や機器のショーケースとなることを期待している。一方で、サンタクルース病院の院長は、「ブラジル社会に定着している日系人の信頼性をベースに、きめ細かい日本式の医療サービスを病院の売りにした

い」と話す。移民国家であるブラジルには、ドイツ系病院やユダヤ系、アラブ系の病院など大規模なトップレベルの病院が存在するが、「おもてなし」の心と効率的な医療サービスの提供は、まさに日系人が積み上げてきたGarantido（信頼できる）という高評価を上手く使った戦略とも言える。こうしたニーズには、日系社会ボランティアなどによる活動も有効であろう。

規制は厳しいが、 日系社会との連携強める

ブラジルにおける医療機器のビジネスは国家衛生監督局（ANVISA）の非常に厳しい規制、欧米企業との競争など、そのマーケットへの参入は決して容易ではない。そのような中、ブラジルで活躍する日系人医師、日系病院との連携が、同国への日本の技術やサービス導入の一つの方策として考えられるのではないだろうか。ブラジル日系社会は日本にとって重要な財産であり、またかけがえのないパートナーである。われわれはブラジル日系病院との連携強化を通じて、優れた日本の技術やサービスの導入につなげ、ブラジルの医療水準の向上を図るとともに、更には日伯友好関係を一層発展させていくことを目指している。



日伯友好病院



サンタクルース病院



日ブラジル外交関係樹立120周年(2015年)のロゴマーク

作者はブルーノ・ヒトシ・テルヤ氏（ブラジル在住）。鶴には縁起物としての意味があるほか、親しい人の健康などを祈って千羽鶴を折る習慣から、友情のシンボルとして着想を得たとのこと。この作品は、応募作品の中から日本・ブラジル両国政府間の協議

により最優秀作品として選考したものです。今後、120周年事業の記念行事や広報資料で活用していきます。このロゴマークは、日ブラジル外交関係樹立120周年事業として認定された事業で使用するすることができます。（外務省ホームページより抜粋）

「再評価」されるブラジルの民芸品 —ペルナンブーコ州の事例から—

山本 綾子（『ブラジル・カルチャー図鑑』著者、在ブラジリア）



第二次大戦前、ブラジルでナショナリズムを高揚させたジェトゥリオ・ヴァルガスは、二度目の大統領就任後の1951年8月、リオデジャネイロで開かれた第1回ブラジル民俗学会に姿を見せた。会場では、大統領の参加に勢いづいたヘナット・アウメイダなどの民俗学者が、自国の民俗芸能研究と保護を目的とした国立研究所の開設を訴え、承認されている。長く続いた西欧文化至上主義に疑問を呈し、自国文化を評価しようとする気運が高まった時代で、1940年代後半に広まった「ブラジル民芸運動」の具体的な成果といえる。1961年には、各地の民俗芸能を取り上げた季刊誌「ブラジル民俗学」が創刊され、自国文化の普及啓蒙が知識層を中心に広まった。

民俗芸能といっても、物語や踊り、祭事など多岐にわたるが、今でこそ身近な Artesanato（以下、民芸品）に注目すると、大衆レベルでその価値が認識されるようになったのは最近かもしれない。

本稿では、民芸品の宝庫とされる北東部ペルナンブーコ州について、ここ数年の動きを紹介したい。民芸品は元来商業目的ではなく、人々の暮らしの中から生まれた芸術である故、その土地の文化・習慣を感じることができる。例えば、同州特産の泥人形や木版画は、狩猟に出かける男性や赤ん坊を抱いて水汲みする女性、干ばつ時に一家揃って移住する姿など、かつての日常生活をモデルにした作品が多い。こうした地元色溢れる民芸品こそ貴重な観光資源になるのだが、一般のブラジル人にとっては自国の貧しい時代を思い起こすものとして評価は限定的だと言う人も多い。

一方、ここ数年の同州政府や関連団体のアクティブな活動が、そうした負のイメージを一掃しつつある。例えば、

州内の民芸品作家に対する支援の一つに「メストリ（師匠、名人の意）」制度がある。ある特定の条件を満たした作家は、専門委員によってメストリに任命され、メストリは民芸品展示会で特設ブースが用意されたり、カタログに作家本人と作品紹介が詳細に掲載される。こうした宣伝効果は、作品の価値向上はもちろん、作家の士気や技術継承の意識向上にもつながっている。地元を離れたことのないような朴訥な（時には愛嬌のある）民芸品作家たちも、一気に全国に名を馳せるアーティストとなる。

拠点整備も積極的で、2003年に州立ペルナンブーコ民芸品センターがベゼーホスに開設されたのに続き、2012年には州都レシフェの旧市街の一等地にも同センターがオープンした。ベゼーホスが歴代メストリの貴重な作品展示がメインなのに対し、レシフェは一見博物館のように見えるがどれも値札のついた売り物で、観光客にとっては見て楽しい、買えて楽しい観光拠点になっている。いずれも非常に立派な建物であることに驚く。

地元民芸品に対する地道な支援は他州でも見られ、こうした活動の成果として、国内民芸品に対する評価の高まりを全国レベルで感じる機会も増えている。日本の「イケア」や「ニトリ」にあたる中所得者をターゲットとした家具販売店の「Tok&Stok」では、室内インテリア用品の一角にあるブラジル民芸品コーナーが年々拡大している。大手スーパー「Pão de Açúcar」でも、ミナスジェライス州の織物製ランチョンマットや、ピアウイ州の古代壁画デザインが描かれた食器などブラジル雑貨が整然と陳列されている。個性派旅行会社が企画する民芸品の里を巡る観光ツアーも俄かに人気という。

数年前の好景気と比べると陰りを見せているが、ここ数年、国内外への観光旅行者が増え、低所得者の間でもテレビやネットが普及したことで世界は格段に広がった。W杯、オリンピックなど国際イベントが続き、海外からの注目も高まっている。ブラジル人は自国を意識するようになり、大衆レベルでも、敬遠気味であった民芸品を母国の魅力として再発見しているようだ。観光資源としても可能性を秘める味わいある民芸品が、今後どのように発展していくか楽しみだ。



写真左：メストリ・ヴィタリーノ、写真上：メストリ・マルリエッチ。彼らのアトリエにはカンボス元知事の写真が飾られていた。民芸品振興に力を注いだ大統領候補の突然の死を惜しむ作家は多い。

ブラジル市場撤退の 留意点



渡邊泰秀
（弁護士。長島・大野・常松法律事務所パートナー）



笠原康弘
（弁護士。同NYオフィス、サンパウロ研修を経て東京オフィスに復帰）

ブラジルは投資先として魅力的なマーケットである一方、複雑な税制、高い労働コスト、競争的な事業環境から、ブラジルからの撤退を検討する日本企業も少なくない。本稿では、日本企業がブラジル市場から撤退するにあたっての留意点を挙げる。

子会社の従業員を解雇する方法

ブラジルから撤退するための大きなステップの一つは、ブラジル子会社の労働者を解雇することである。ブラジルの労働法制は労働者を強く保護しており、解雇の場面においても労働者を保護する法制・手続がある。具体的には①解雇する月については解雇する日までの日割りの給料を支払う②休暇を取得することが可能な従業員について1日でも未消化の休暇があれば月給の1月と1/3月分の金額を支払う③休暇を取得する資格を有していない場合であっても雇用期間に応じて休暇に関して一定額を受け取ることができる④雇用月数に応じて年度末ボーナス（13th salary）を支払う⑤解雇に当たって従業員に対して支払う総額の8%についてはFGTS（失業手当基金）に預け入れする⑥従業員を会社都合で解雇する場合には雇用期間中に当該従業員のFGTSの口座に預け入れられた金額の50%をペナルティとして追加でFGTSに預け入れなければならないなどの規制がある。

手続の面では、雇用年数に応じた事前通知を行う必要がある（30日＋雇用年数×3日）、労働組合による解雇の承認（ブラジル子会社自体に労働組合がなくとも子会社の業種によって該当する業種別の労働組合による承認が必要となる）、及び解雇時の医療検診の実施などの手続が必要とされている。

仮に上記の規制や手続を遵守したとしても、解雇手続後に元従業員から未払い賃金の支払いなどを求めて裁判を提起される可能性は低くはなく、結果的に、裁判が終了するまでは子会社を清算・解散することができない可能性もある。

子会社を解散・清算する方法

ブラジル子会社を解散・清算手続は、会社において清算手続を開始する旨の株主総会決議から開始される。資産が債務を超過している場合には、債務の弁済を行った後に残余財産を株主に分配することになるが、債務超過の場合には、株主が会社に追加出資をして債務超過を解消するか、又は倒産手続に移行することになる。倒産手続に移行することなく資産・債務の清算手続が完了した場合には、株主は会社を消滅させるための解散の決議を行い、州の商業登記所に会社の解散を登録することで会社の清算・解散手続は完了する（但し、会社の事業内容によっては、衛生当局、連邦警察その他の管轄当局における別途の手続が必要となる場合もある）。なお、上記の清算決議及び解散決議は、官報及び広く流通している新聞において公告しなくてはならない。

また、これまでは、会社の解散を商業登記所に登録するためには、①FGTSについての債務がないことの証明書（Certificado de Regularidade do FGTS）②社会保障に関する債務がないことの証明書（CND do INSS）及び③連邦税について未払いがないことの証明書（CND da Receita Federal/PGFN）を提出する必要があったが、2014年8月に施行された2014年法第147号により、会社の解散を登記するために上記の書類は必ずしも必要とされなくなった。但し、商業登記所に上記の書類が提出されなかった場合には、仮に会社に何らかの未払い債務があった場合、当該会社の株主又はマネジャーは、会社と連帯して当該未払い債務について責任を負わなければならないとされている点に注意が必要である。

もっとも、ブラジルへのゼロからの再進出は必ずしもハードルが低くないことを考えれば、従業員を解雇しても会社の清算・解散までは行わず、ブラジルの居住者をrepresentative（代表者）にして、将来の再進出に備えて事実上の休眠会社として存続させておくことも合理的な選択肢といえる。

フルッタフルッタ上場の陰に…

長澤 誠（株式会社フルッタフルッタ 代表取締役 CEO）

2014年12月17日、株式会社フルッタフルッタは東証マザーズ市場に新規上場を果たした。ブラジルの産品だけを扱う純日本企業の上場は史上初ではなかろうか。

上場当日、お祝いに駆けつけてくれたブラジルのパートナー、トメアス総合農業協同組合（以下 CAMTA）の理事らとともに、総勢 30 名ほどの社員総出で東京証券取引所に足を踏み入れた。平均年齢 35 歳の、まるで我が子のように可愛い社員達だ。テレビでよく目にする東証の象徴的な円形の電光掲示板に「祝上場 株式会社フルッタフルッタ」の文字が照らし出されると、皆の気分が高揚した。

その中に、私は大切な友を連れて来ていた（写真は遺影を持つ長澤 CEO）。北部ブラジル、ベレンのドン、北島義弘である。無念にも渡伯 50 周年を目前にした 2013 年 5 月に、74 歳でこの世を去った当社の現地代理人であり、起業前より心血を注いで支援してくれた陰の功労者である。

北島は 24 歳で海外商業実習生として移住し、CAMTA の職員となった。その後ベレンで貿易業や観光業を営む傍ら、パラ日系商工会議所の創立に携わり、アマゾン日伯協会理事、日伯交流協会地方理事を歴任。更にブラジル日本交流協会研修生の受け入れ窓口も務めた、北伯の日系社会の重鎮的な存在であった。

彼との出会いは 2000 年のことで、当時私がアマゾナス州でクプアスの安定供給可能な生産者を探訪していた折に、パラ州に一大生産地があるからベレンのキタジマに会いに行くようにと促されたのがきっかけとなった。

ほどなくして彼のオフィス、アマゾン・トラベル・サービスを訪ねると、CAMTA 理事長（当時）の伊藤ジョージ氏が偶然北島に会いに来ていたところだった。

私の経緯を説明するや否や、まさに目の前にいる伊藤氏の組合でクプアスを生産している、とトントン拍子で話が進み、その場でトメアス行きが決定した。

その後私はトメアスの日系生産者達とアグロフォレストリーに出会い、クプアスから一転してアサイーとその他のフルーツ原料を CAMTA から独占輸入する権利を得て、2002 年の起業に至る。CAMTA の組合員達によそ者の私を認めてもらえるまで時間を要したが、北島は私に夢を託すかのように CAMTA との橋渡し役を引き受けてくれた。

当社の企業理念は「自然とともに生きる」である。これは、

熱帯の厳しい環境下で農業移民としてトメアスを開拓してきた移住者たちの生きざまを文字にしたものだ。

彼らが営む「森をつくる農業」と呼ばれるアグロフォレストリーは、開拓初期に財を成したコショウのプランテーションが病害で壊滅的な被害を受け、その反省から農地に複数の農林作物を混植する“多様性”を取り込んだ栽培を試みたのが始まりである。多様性の重要性を何から学んだのか。それは、周囲に住む先住民族達の姿からだったという。決して裕福な暮らしではないが、彼らは飢えずに生きている。そして住まいの周囲には様々な有用植物が植えられていることに気付くと、「一つの作物が採れなくなっても、他のもので食べていくことができる」というリスク分散が成り立っていることを知ったのだ。

これこそが「自然とともに生きる」である。人類は経済発展と共に環境を破壊し続けてきたが、永久に持続する訳ではない。いつか資源は枯渇するのだ。更に効率性を追求せんがために、人類はモノカルチャーをベースとした文明を発展させてきた。「自然とともに生きる」とは、その真逆を示している。

人間は多様性の一部でしかない。多様性とは、すなわち「自然」そのものであり、そこから得られる資源がなければ我々人類は発展の基盤を失うことになる。

2012 年のリオサミットで「グリーンエコノミー」が提唱されたように、経済と環境が共存する新たな社会を築いていくことが、人間社会に課された次なるテーマだ。そしてまさにアグロフォレストリーは、グリーンエコノミーの数少ない先進事例なのである。

当社は、ビジネスを通してアグロフォレストリーを発展させ、農業技術とビジネスモデルを世界中に拡大することを真の大義としている。

上場は「第二の創業」と言われるように、通過点の一つに過ぎない。北島が見つないでくれた「きすな」をどう広げていくかは、我々の腕に懸かっているのだ。



シコ・ブアルケの小説第五作を巡る ファクトとフィクション

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



MPB(ブラジルポップ音楽)の重鎮シコ・ブアルケ。1944 年生まれだから、今年 71 歳となるが、今や、シンガーソングライター稼業は副業で、作家・小説家が本業というべきだろう。というのも、彼の小説作品第五弾が、昨年 11 月に刊行され、またまた大きな話題となっているからだ。2 月上旬筆者が覗いたサンパウロ市内の大型書店では、この最新作がうず高く平積みされており、話題作であることを視覚でも確認した次第だ。

第三作『ブタベスト』（2003 年）は、ゴーストライター業の主人公がブタベストに降り立ち、美しいハンガリー女性と恋におち、という文学的完成度の高い二都物語だったが、ブラジル国内だけで 30 万部以上のベストセラーとなり、白水社から邦訳（訳者は武田千香教授）も出ている。第四作『こぼれたミルク』（2009 年）は、リオの名門ファミリーの四代にわたる没落物語で、文芸批評の玄人筋には高い評価と酷評が乱立したが、前作同様、英語、仏語、ドイツ語などに翻訳され、欧米でも評判になった。二作品ともに目を通して、シコの作家としての力量に素直に感心した筆者としては、「少なくとも最近の芥川賞受賞作品よりはシコ小説のほうが、はるかに面白いなあ」と感じたものだ。今回の『オ・イルマウン・アレマウン（直訳：ドイツの兄貴）』は、シコの腹違いの兄についての物語で、事実とフィクションをシコ風にカクテルした作品となっているが、今回も佳作だ、というのが筆者の正直な評価である。

この最新作の内容に入る前に、まずなによりも彼のオヤジである文人セルジオ・ブアルケ（歴史学者）の青年時代のラブストーリーを若干フォローしておかねばなるまい。1936 年に刊行された『ブラジルのルーツ（邦訳タイトル：真心と冒険）』においてブラジル人エトスとして homencordial(真心ある人)概念を定説化したが、この古典的ブラジル社会論は、マックス・ウェーバー社会学の影響が明らかである。これは、1929 年から 30 年にかけて、O Jornal 紙の欧州特派員として 2 年間ベルリンに滞在したセルジオが、原書を貪り読んでワイマール文化を貪欲に吸収した成果であり、この特派員時代の実績としてはトーマス・

マン（彼の母親はブラジル人なので、マンはブラジル系ドイツ人作家だ）との長いインタビュー記事が有名だ。こうしたジャーナリスト活動と“並行して”アンナというドイツ娘とイイ仲になっていたことも、ファクトであるが、セルジオは、この“落胤”の顔を見ることなくブラジルに帰国してしまったため、セルジオ家族（子供 7 人、長女はミウシャ、シコは 4 番目）では、この腹違いのセルジオ二世については知られざる歴史にしてタブーとなっていた。

この事実をシコが初めて知ったのは 1967 年、22 歳の時、セルジオと同時期ドイツに留学して親交があった詩人マヌエル・バンデイラが、この“昔話”を開示したからだ。長年の疑問を解明すべく、シコが調査を開始したのは 2012 年だが、ドイツ在住のブラジル人歴史学者らの協力をえて、難しく絡み合ったパズルが紐解かれていった結果、この兄貴、セルジオ・ギュンダー（1930-1981）の生涯がほぼ明らかになったのだ。

ギュンター家の養子となったセルジオ二世は、旧東ドイツの国営 TV 局所属の報道記者にしてミュージシャンとして有名人になっていたのだから、これは、オヤジ（歴史学者だが、ピアノも弾く音楽愛好文化人）の DNA だろう。セルジオ二世の娘や孫（動物学専攻の女子学生）をリオに招待して、80 年ぶりの“拡大家族会”を楽しんだりしながら、こうしたセルジオ物語のファクトを踏まえて、シコは小説第五作を構想していったのだ。

こうした週刊誌的情報に全く接することなく、この最新作を読んでも、読者は文学作品として完熟度の高い小説を味読することになる、と筆者は考えるものであるが、日本人には、森鷗外の『舞姫』を巡る物語を想起させるお話でもあり、なんとも興味深いと言わざるを得ない。小説家シコ・ブアルケは、ブラジル文学史に残ることは間違いなく。

カンポリンポの丘に校歌が流れる



服部公一
(作曲家。学習院大学、米ミシガン州立大学に学ぶ。童謡「アイスクリームの歌」の作者)

サンパウロ市郊外のカンポリンポにあるその学校に鈴木康之領事の車でいった、丘あり谷ありの広大な敷地に新設の校舎が光っていた。日本では望めない、これぞブラジルの大地というべき広大な環境が楽しく校歌の制作一切と作曲を喜んで引き受けた。そこはブラジル在留日本人の子どもたちの小学校と中学校、1975年秋であった。

私は在校生全員が歌詞作りに参加することを提案した。それをプロの作詞家に添削してもらい、さらにそのポルトガル語訳をつけ両国語で歌える校歌の作曲ということになった。私の海外日本人学校の校歌制作第1号である。

日本では大学から幼稚園まで必ず校歌がある。これは良いことだと思っている。しかし海外では学校が制定した校歌を聞いたことがない。このサンパウロ日本人学校校歌は1978年の日本人移民70年祭を期して出来たものだ。

私が何度南米大陸と往復したのか今正確に言えない。多分10回以上。そもそもは1975年の秋ミシガン州立大学の教育ミッションでアルゼンチンに行き、帰りに寄り道してサンパウロの日本人街で寿司を食べたのが南米とのおつき合いの始まりである。そのときホテルの近くにあった日本国総領事館へある電話番号を調べ

に行き、出会ったのが文化担当の鈴木康之領事だった。彼は音楽好きらしく私の名前を知ってくれていた。ちょうど昼飯の時間となり彼は領事館とおなじビルの2階のレストランに案内してくれた。ここのオーナーがいさつにきたがそれが揮旗敏雄氏。何と彼はサンパウロ歌劇場交響楽団のピオラ奏者だった。この楽団には近年常時数名の日系奏者が在籍しているという。

席上鈴木領事が70年祭の音楽企画がまとまらなくて困っている話をした。そこで臨時に私も飛び入りでその相談会に出席することになった。そこではN響招聘、オペラ「夕鶴」の上演など日系人の夢らしく壮大な希望が出たのだが、結局、皇太子御夫妻臨席のサンパウロ歌劇場でオーケストラの祝典音楽会、プログラムは服部公一新作の「祝典序曲」と日本とブラジルの現代管弦楽曲。それに鈴木領事が熱心にすすめていた、前記の日本人学校校歌の制作、ということに落ち着いたのであった。

今も私はカンポリンポの丘にあの校歌が流れているだろうとうれしく思っている。

——このあと私はシアトル（アメリカ）、イスラマバード（パキスタン）の日本人学校、ポルトアレグレ（ブラジル）の現地学校の校歌を作曲した。

サンパウロ日本人学校校歌

作詞／在校生一同、補作／生地靖之、作曲／服部公一

今日もカンポリンポの丘にたち
はるか空を見上げよう
地球をつつむ青空よ
世界をつつむ綿雲よ
伝えて欲しいここに我らありと
ああ、サンパウロ日本人学校

明日もカンポリンポの丘の上
豊かに夢を育てよう
地球をつつむ太陽よ
ブラジルの大地よ
伝えて欲しいここに希望ありと
ああ、サンパウロ日本人学校

Hino da Escola

訳詞／河面徹郎

Hoje também
Da colina de Campo Limpo
Vamos contemplar ao longe
O céu azul que envolve a Terra
Oh! Grandiosa Terra, Brasil
Transmita que estamos aqui
Transmita que aqui há esperança
Oh! Escola Japonesa de São Paulo



「香りモンスターのブラジル人」

パウリーナ 新子 西原
(アバンセコーポレーション・海外事業
企画担当、サンパウロ生活17年)

ブラジル人はきれい好きだ。1日に何度もシャワーを浴びるのは当たり前で、朝の出勤前と夜寝る前は必ず、仕事の後友達や仲間と夜の街に飲みに行く時もわざわざ一旦帰宅してシャワーを浴び、着替えてから繰り出す。私はサンパウロで某日系企業の化粧品部門のマーケティングを担当していた事があり、日本人とブラジル人のスキンケア、ヘアケア、ボディケアの意識や好みの違いについて考える機会が多かった。

ブラジル化粧品市場の規模は大きく、米国、日本に次ぐ世界3位と言われているが、統計によっては2012年に480億ドル（約4兆5076億円）で日本を抜き世界第2位になったとも言われている。商品別にみると、香水やデオドラント（防臭剤）は世界1位、ベビー用品やヘアケア用品では世界3位の市場となっている（JETRO調べ）。

日本人とブラジル人で1番違いがあったのはやはり、「ニオイ」に関して。単一民族で比較的体臭が薄い日本人に対し、様々

な人種が混在するブラジル人は神経質な程体臭を気にする人が多い。そのためにシャワーのあとは、デオドラント商品を使用し、香水で仕上げる。それが統計にもハッキリと表れており、ニオイに関する商品は世界1の売れ行き。

清潔なのは大いに結構だし、化粧品会社にとってはどんどん消費してもらえてありがたい限り！だが、香水類には注意が必要で、常用しているうちに本人は香りに慣れてしまい、知らぬ間にどんどん使用量がアップしてくる。ブラジル人は総じて強めの香りを好む傾向があり、ヘアケアやボディケア商品にもたっぷり香料が使われている。これらの商品をガッツリつかって身支度を終えた後は、すでに多くの香りが混じり合った状態。そして最後にダメ押しの香水。こうして数メートル先からでも人物を特定できる「香りモンスター」が出来上がる（笑）。体臭には敏感でも人工的体臭には無頓着なところが面白い。

ジャーナリストの旅路

大リーグ、次の狙いはブラジル？

市川亮太
(時事通信社ロサンゼルス特派員。
早稲田大卒、04年サンパウロ特派員)

何の因果かスポーツ担当を命じられ、3年ほど野球取材を中心に北米大陸を駆け巡っているが、最近ひしひしと感じるのが大リーグのブラジルに 向ける熱い視線だ。

サッカーのイメージが強烈すぎるだけに、ブラジルと野球は結びつけにくい。が、実はヤクルトがサンパウロ近郊に同国屈指の野球総合施設を有して普及を主導した関係で、日本のプロ野球のヤクルトではかなり前からブラジル人選手が活躍していた。一方、本場米国ではキューバやドミニカ共和国、ベネズエラ、コロンビアなど環カリブ海が人材発掘の中心地で、ブラジルは蚊帳の外。2012年になってヤン・ゴームズ捕手（インディアンズ）が大リーグの重い扉をこじ開け、間もなくアンドレ・リエンゾ投手（マリリンズ）が続いた。イチローが所属したマリナーズは目下、ブラジル人選手発掘に特に熱心に取り組んでいる。

2013年に行われたワールド・ベースボール・クラシックでは、強豪並み居る中南米予選を勝ち抜き、日本での本

大会へ。晴れの舞台で頭角を表し、大リーグも人材供給地としてはもちろん、グッズや放映ビジネスの潜在的なマーケットとして、昨年あたりから開拓に本腰を入れ始めた。

とはいえ、肝心のブラジルでは野球は今もマイナースポーツ。サンパウロ出身のリエンゾも、野球を始めたのは「母親が非行防止で日本人の規律 と礼儀正しさを学ばせようと、兄弟ごと近くのチームに入れた」から。スポーツとしての将来を見据えた動機ではない。やはり、万国共通で「儲かる」ことがプロスポーツの条件。実績のない野球が見向きもされないのは当然だった。

そんなブラジル球界に朗報がある。昨春、ゴームズがインディアンズと6年230万ドル（約27億円）の契約を結び、正捕手の座を奪取。かつ、優れた打者に贈られるシルバースラッガー賞を獲得した。ブラジル人の潜在能力とともに、一流サッカー選手並みのカネが稼げることを内外に 証明した彼の活躍は、ブラジルを野球に呼び寄せる起爆剤となりそうだ。

米球界の本格的なブラジル攻勢はまだ始まったばかり。ただ、大リーグがいったん動きだせば、並々ならぬ意欲と巨額投資で市場を一気に開拓するのはドミニカ共和国などで証明済み。長年培われてきた「ブラジル＝サッカー」の図式が崩れる日もそう遠くないのかもしれない。

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
<http://career.nikkei.co.jp>

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア8カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュラロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

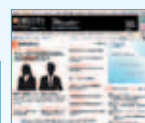


NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp <https://www.nikkeihr.co.jp>